

まちかど・ズームIN!

地域ぐるみで環境整備

テングス病の桜の枝除去



4月5日、旧国道4号とバイパス間の白石川堤の桜並木で、地元自治会などによる桜の木のテングス病除去作業が行われました。

作業に参加したのは、西益岡、新町、短ケ町、亘理町の自治会や市役所、東北電力グループなど合わせて約60名。雨の中、電力の高所作業車を使い、ノコギリでテングス病にかかっている桜の枝を丹念に切り落としました。

このほか、土手の雑木の伐採なども行われ、地域ぐるみで環境整備に取り組みました。

市民の生の声を市政に

市政モニターに委嘱状を交付



平成12、13年度「市政モニター」の委嘱状交付式が4月16日、市役所で行われました。市政モニター制度は、市民の生の声を市政に広く反映させようと平成4年に制定されたものです。今回は、市内各地区40名のモニターが川井市長から委嘱状を受け取りました。

モニターには今後2年間、随時市政への提言や市が実施するアンケート調査に協力していただきます。



▲NPO「不忘アザレア」による清掃活動

ミズバショウを眺めながら、本格的な春の訪れを感じていました。

また、開園間近の4月9日、NPO法人「不忘アザレア」が水芭蕉の森の清掃活動を実施。参加した15名は駐車場周辺の空き缶を拾ったり、木道にたまった枯れ葉などを掃いてハイカーの訪れに備えました。

甲冑姿で「安全運転」呼びかけ

春の交通安全運動街頭キャンペーン

春の交通安全運動初日の4月6日、市内では大平の国道4号で、白石地区交通安全協会が街頭キャンペーンを行いました。



この運動に白石警察署員や交通指導隊員と一緒に参加したのが、ダンボールなどで甲冑をつくる活動を続けている「甲冑工房片倉塾」の塾生8人。「身を守る昔甲冑、今シートベルト作戦」と題し、武者姿でドライバーたちにシートベルトやチャイルドシートの着用など、交通安全を呼びかけました。



湿原の貴婦人...春の訪れ

「水芭蕉の森」開園

4月12日、県内有数のミズバショウの群生地、自然散策コースとしても人気を集めている市内福岡深谷地区の「水芭蕉の森」が開園しました。この日は雨交じりの天候でしたが、テープカットが終わると、散策者が3.6%の園内に一斉に入り、雪解けを待ちかねたように膨らんだ

電光で観光振興を

白石駅前に電光表示板完成

白石駅前の観光案内所に、市役所関連の情報やニュースなどを流す電光表示板が完成し、4月1日から点灯しました。この表示板は、市からの補助を受けて白石市観光協会が設置したもので、市役所関連情報のほか温泉地、地場産品、商店街イベントなどの情報が午前6時30分から午後9時まで提供されています。



みなさんからの素敵な情報を待ってます!

福祉活動に役立てて

公民館まつりの売上金を寄付



3月10日から12日に中央公民館で開催された第19回公民館まつりで、即売コーナーに参加した団体が福祉活動に役立ててほしいと、売上金を社会福祉協議会へ寄付しました。

この団体は、野草に親しむ会、陶芸サークル、押し花講座など8団体で、3月24日、公民館まつり実行委員会の佐藤元子委員長が社会福祉協議会を訪れ、109,158円を寄付しました。社会福祉協議会ではこの寄付金を福祉活動基金に入れ、その果実を運用することにしています。

文化・スポーツで好成績

吉見教育基金顕彰式

3月30日、市役所で吉見教育基金顕彰式が行われました。これは、平成9年3月に閉園した和洋裁学校「吉見学園」さんから、市に寄付された3,350万円を基金とした吉見教育基金の運用益を利用して、市内小中学校児童生徒の文化・スポーツに顕著な方々を表彰するものです。



今年度表彰されたのは、白石中新体操部・合唱部・吹奏楽部、東中新体操部の4団体と5個人で、顕彰状および記念品が贈られました。

大好評のうちに四月九日に幕を閉じた「悠久の大インカ展」は入場者に大きな感動を与えた。百六十七点に及ぶ展示品のうち、最も話題を呼んだのは「哀しみの美少女フワニータ」である。

私が、ある委員会を通じて近くしていただいた東北学院大学教授の上田良光先生は、宮城ペルー協会の会長である。悠久の大インカ展は上田先生の力によって、仙台市立博物館で開催することができた。

アンデス文明、インカ文明という、私たちはまず、海抜ゼロメートルから六千メートルの急峻な山に至るまでの、マチュピチュやサクサイワマンのような、かみそりの刃一枚通らないと言われる石組みの技術を持ちながら、車も文字も持たなかつた謎の文明を思い浮かべる。もう一つは黄金文化である。



川井市長のせせらぎトーク

哀しみの美少女

で最初に黄金を加工して装身具などを作ったのは、北海岸のクヒスニケ文化である。これは今から三千年前にはさかのぼる、南北アメリカ最古の黄金文化であり、発見されたのが、くしくも東京大学古代アンデス文明調査団である。以後、種々の黄金文化が中央アンデスに栄え、その集大成がインカ帝国の文化であった。

中央アンデス
いて大量の金細工をすべて収奪し、それを溶かして延べ棒にしてしまったのである。それ

は三千年にわたるアンデス文明の破壊でもあった。

インカ文明再発見の中で最も衝撃的だったのが、今回日本初公開の「アンパトのフワニータ」である。一九九五年九月八日、後に「フワニータ」と名付けられる少女のミイラが発見される。彼女は標高六千三百メートルのアンパト山頂付近の氷塊の中で、ひっそりと凍り付いたまま五百年の眠りについていた。一四四〇年から五〇〇年の間にミスティ山が噴火し、インカの都市アレキバが破壊される。ミスティ火山噴火を鎮めるために犠牲として捧げられた彼女は、インカ王と太陽神に仕える巫女で、十三才から十四才と推定されている。

エジプトのように砂漠の乾燥の中でミイラになったのではなく、氷に閉じこめられていた哀しみの美少女は、あでやかな髪や細い首筋、そして薄い氷に覆われたいかにも少女らしい腕など、かつての麗しさを今なお保っていた。日本人がペルーに移住して百年になる。九〇年にフジモリ政権が誕生して、いっそう両

国の関係は深まっているが、ペルーは貧しく、それ故に学校が少なくない。上田先生の悲願はペルーに学校を建設することにある。

五月二十八日、午後二時三十分からホワイトキユーブで、宮城ペルー協会主催のロス・トレス・アミーゴスの「ペルー支援学校建設基金チャリティ・フォルクルーレコンサート」がある。入場料は二千五百円。文盲率が三〇パーセントとも言われるペルーの教育水準向上のために、市民の皆さんが誘い合わせでおいでになり、善意の一燈をともしいただきたいものである。

フワニータ

ミイラ（凍結した体）
H50cm L70cm W40cm 21kg
アンデス聖地博物館所蔵

凍結状態で発見されたため、乾燥したミイラと異なり、軟組織も保たれている。上衣、帯、包まれた毛布なども残されている。



写真・資料提供
悠久の大インカ展仙台実行委員会